聞き手
岡村美好
編集委員

この人に聞く

Palm Jumeirah monorail 工事事務所長（大林組）

近江 英家 さんに聞きました

OMI Hideya

2006 年 5 月 15 日（月）JETRO ドバイ事務所

24 年間にわたって海外の仕事に携わってこられた Palm Jumeirah monorail 工事事務所長 近江英家さんに、海外での仕事の魅力やドバイでのプロジェクトの特徴などについてお話を伺った。

魅力は自由度の大きさ

――これまでの海外経験とかかわった主要なプロジェクトは？

近江――大林組に勤めて 32 年ですが、海外は全部で 24 年になります。シンガポール 10 年、タイ 2 年、バングラデシュ 2 年、ラオス 7 年半、ベトナム 2 年半、UAE（アラブ首長国連合）のドバイに来て半年になります。

シンガポールでは埋立工事 5 年、地下鉄工事 5 年、タイのバンコクとバングラデシュでは橋梁工事、ラオスでは小さい橋 48 個所と 73km の道路工事、ベトナムではハノイの橋梁工事、そしてドバイでモノレール工事です。

――海外の仕事の魅力は？

近江――日本と比べると、海外では何もかも自分たちでしなくてはいけません。日本の場合、計画の段階である程度決まっていて、施工の段階で変更できるのは狭い範囲です。海外では、計画から見積もり、獲得、施工、完成までの一連を自分たちでできるので、自由度が大きい。もちろん責任も大きくなりますが、それが魅力であり醍醐味ですね。また、分割発注のスケールが日本よりもずっと大きいのも魅力の 1 つです。

UAE ではローカルが見えない

―― UAE とこれまでの海外経験との違いは？

近江――東南・南西アジアでの経験からいうと、UAE ではローカルの人たちがわれわれコントラクターの目に見えるところにはあまり出てきません。接する人たちすべてが自分たちと同じ外国人だというところが大きな違いだと思います。

――プロジェクトでの違いは？

近江――計画と設計、施工の間の期間が非常に短いです。たとえば、

ODA や JICA の場合は計画の段階でかなり長い時間を費やしていますが、ここはそれが非常に短い。計画が練れていないための歪みはコントラクターの工事のほうに大きく影響は出るだろうと思われます。

――こちらでのスタッフの内訳は？

近江――日本人技術者は 15 人です。日本人以外は、イギリス人、フィリピン人、インド人、ノルウェー人で約 50 人。これから日本人以外のスタッフの人数はもっと増えて、倍以上になると思います。

――人種が多様ですが、所長としてのご苦労は？

近江――一番の苦労は外国人よりも海外初体験の日本人技術者たちで、日本国内での経験と海外での技術的検討や工事運営などをお互いにどう理解し合うかです。次は、外国人が多いドバイでのプロジェクトの運営を考えると、それぞれの民族性や特性を見つけてそれを生かしていく、それが悩みではありませんが、私の所長としての仕事だと思っています。

興味がある人はぜひ海外へ

――日本は公共投資が縮小され、土木関係は厳しい状況です。若い人たちはもっと海外へ出たほうがよいと考えておられますか？

近江――興味ある人は海外の仕事は一度でもいいからやったほうがいいし、やるべきだと思います。マイナスになることはないと思います。土木工事の分野でやっていきたいと思っている人が海外でやると、もっとやりがいや生きがいみたいなものが見つかると思います。ただ、これは好きでないとだめだと思います。非常に苦しいときもありますし、体力的にも厳しいことはどこのプロジェクトでもありますので、積極性があって体力のある人で、海外に興味がある人はぜひ海外へ出てやったほうがよいと思いますね。

――工事事務所で見かけた女性たちの仕事は？

近江――まだ女性の技術者は一人もいませんが、QS（Quantity Surveyor、積算士）として働いている女性は大勢います。QS はイギリスのシステムで、日本にはない職種です。技術職と事務職の中間のような仕事で、図面を見ながら物を注文したり、クレームする[注1)]ときはクレームレターを書くなどの仕事をしています。

――皆さん日本の方ではないようですが、日本の女性技術者は？

近江――日本の女性技術者も雇わないことはないですね。工事現場のなかでも限られた分野になるとは思いますが、女性技術者も海外の仕事に従事することは常時可能だと思います。

自覚、忍耐、強い意志、そして好奇心

――最後に、海外へ出たいと思っている若い人たちに、海外へ出る前に何をしておくべきか、アドバイスをお願いします。

近江――好奇心を旺盛にして、体を鍛えて、専門的な勉強は当然勉強してくるに越したことはないですが、特にこれを準備してきたほうがいいというのはないような気がします。

それよりも、海外に行くと一度は自分の裸をさらけ出さなくてはいけないんですね。そうすると自分には何もなかったと思えます。自分としてはいろいろ勉強をして仕事もしてきたつもりであっても、海外に出れば何もしてこなかったと思えるような状況が常にあります。そのとき、それを真に受け止められるか、いかに自覚できるか、それらに耐えうるか。それから再スタートする強い意志がないと海外では続かないと思います[1)]。

それと、私が若い頃思ったのは、私とかかわりをもった人たちは互いに何が同じで何が違うのかということです。違うところをいかに理解するかが大事なことなのではないかと思ってやってきました。

これまで若い人たちと一緒にやってきて、所長の職務の 70 %くらいは人のことを考えなければいけないかなあと思っています。それが一番大きな所長としての仕事だと思います。

特に海外だからといって勉強するのではなく、一番大事なのは好奇心が続くことだと思います。興味がなくなったら、しんどいことをすぐしんどく思ってしまう。好きなことが一番だと思います。

――本日は、貴重なお話をありがとうございました。

注 1）設計変更なり、条件変更に伴う請負金額の変更を要請すること。

参考文献

1）近江英家：水をえた魚のごとく海外で働いている人たちとは　海外プロジェクトの人材、土木学会誌、Vol.89, No.3, pp34-36, 2004

▶▶▶

[関連記事：担当プロジェクトについては CE リポート「中東初の新都市交通システムプロジェクト」(52 ページ) をご覧ください]